呉文藻の政治性

牧　野　格　子

1，は　じ　め　に

中国現代文学を代表する女性作家の一人である謝冰心（1900-1999）の夫，呉文藻（1901-1985）は，中国社会学，人類学の祖といわれる学者である。しかし，彼の人生や学問に関する功績はあまり知られていない。

呉文藻は有名な女性作家の謝冰心を妻に持ち，彼女と共に激動の人生を生き抜いた。彼がこの世を去ったとき，謝冰心は「我的老伴――之二」[1]で，呉文藻が書いた「呉文藻自伝」には，謝冰心について書かれているのはたった二箇所で，「至于儿女们的出生年月和名字，竟是只字不提。（息子や娘たちの生年月日や名前に至っては，一言も触れられていません。）」と書き，さらに呉文藻の教え子が書いた追悼文に「吴老曾感慨地说‘我花在培养学生身上的精力和心思，比花在我自己儿女身上的多多了。’（呉先生はかつて『私が育てた学生に注いだ精力と気持ちは，自らの息子や娘に注いだものよりずっと多かった。』と感慨深げに言いました。）」と書いてあったと述べている。

謝冰心が書いた文章からは，呉文藻が学問にその一生を捧げたことが分かる。そんな彼を謝冰心は愛しく思い，その死まで支え続けたのだろう。しかし，呉文藻は学問ばかりの人生を送っていたわけではない。その学問を行うために，歩んだ道程は平板ではなかった。特に盧溝橋事件後，1938年呉文藻一家が北平を脱出し雲南へ逃れた時から苦難の道は始まった。その後1940年重慶に移り，呉文藻と謝冰心が国民政府の中に入り仕事をし始

めた時，政治と慎重に対処せねばならなかった。

呉文藻は国民政府の中で仕事をしたが，国民党に入党したわけではなかった。そのことに関しては後の1982年彼が書いた「呉文藻自伝」[2] には，「国民党の統治に対し不満があった」と書いているが，これは後に書かれたことであり，当時の心境を示すものではない。しかし，彼が当時書いた文章から，彼が如何なる政治的な考えを持っていたかを探ることはできる。

呉文藻の人生と彼が学問の発展に対する貢献については，「呉文藻自伝」と『呉文藻人類学社会学研究文集』[3] から知ることができる。

本論文ではこの二つの著作を中心に，呉文藻が学問の発展に対し如何なる貢献をしたのか，そして如何なる政治的な考えを持っていたのかを探ることにする。

2，呉文藻とその学術的功績[4]

呉文藻は1901年江蘇の江陰の商家に生まれた。1914年，13歳のとき清華学校に入学した。清華学校はアメリカによる義和団賠償返還金によって作られた学校であった。アメリカへ中国人学生を派遣するための教育を行う専門機関であった。

1923年呉文藻は清華学校を卒業し，アメリカに留学した。彼はニューハンプシャー州のダートマス・カレッジの三年生に編入した。清華学校を卒業するとアメリカの大学の 3 年生に相当したという。呉文藻はそこで社会学を専攻した。

その後，呉文藻はニューヨーク市のコロンビア大学大学院社会学科に移り，さらに社会学と人類学の学問を深めた。1926年彼は修士号を取得した。修士論文の題名は「孫逸仙の三民主義学説」である。続いて1928年博士号を取得した。博士論文の題名は “The Chinese Opium Question in British Opinion and Action”[5] である。この論文はアヘン戦争勃発時，イギリス政府が如何なる意見を持ち行動したかについて述べた論文である。大部の論

文であり，実際にイギリス内閣資料室に行き資料調査を行ったという。

1929年呉文藻は帰国後，アメリカ留学へ行く船上で知り合った謝冰心と結婚した。その後，清華学校と燕京大学で社会学と人類学を教えた。

1929年から1938年夏まで，燕京大学と清華大学で教えた科目は「家族社会学」，「西洋社会思想史」「当代社会学学説」，「人類学」などであった。他に海外から多くの有名な社会学者を招き，短期講座を開いて，中国社会学教育の発展に貢献した。さらに多くの人材を教育した。彼の教え子の中には，費孝通，林耀華など多くの中国社会学における権威がいる。

1937年盧溝橋事件が勃発し，日中戦争が始まった。日本軍が北平を占領し，多くの大学が北平を脱出した。が，燕京大学はアメリカ資本で創られた大学であったため，日本軍による占領を免れた。

しかし，呉文藻一家はこれ以上北平にはいられないと判断し，雲南大学へ赴任することに決めた。1938年戦火を逃れ呉文藻一家は北平から雲南の昆明まで長い道程を移動した。雲南大学で彼は社会学，人類学講座を担当した。雲南大学で社会学科が新たに創設された。この社会学科はイギリスによる義和団賠償返還金によって作られたものだった。呉文藻は学科主任となったのである。

その後，イギリスによる義和団賠償返還金が妨害を受け，講座を続行できなくなったため，1940年呉文藻一家は重慶に移ることにした。彼は重慶国民政府の中で働くことに決めたのである。彼は国防最高委員会参事室に勤めた。彼を誘ったのは清華学校の同級生で，アメリカ留学生でもあった浦薛鳳，顧毓琇であった。

重慶の国防最高委員会での実質の仕事は1941年２月から始まった。そこで呉文藻は辺境の民族，宗教，社会問題に関する研究を行った。

参事室での仕事の一環として，1943年から45年まで三度にわたる海外訪問を行った。訪問国はインド，アメリカなどであった。インド訪問では，民族と宗教の衝突問題に関し調査を行い，多くの調査資料を得たという。

アメリカ訪問では，アメリカにおける社会学研究の発展の速さをつぶさに見たという。

1945年第二次世界大戦終了後，46年初めに朱世明将軍が率いる国民党中国駐日代表団に入り，政治組組長兼同盟国対日委員会中国代表顧問となった。来日後１年で代表団を辞し，その後シンガポールの星檳日報の記者として日本に残った。1951年大陸に戻った。1953年10月に中央民族学院教授となり，その後30年以上勤めた。

呉文藻の学術上の功績として，彼自ら次の四点を挙げている。①西洋社会政治思想の紹介と評論，②「社区」研究の提唱，③「社会学中国化」の主張，④効能主義の理論と方法の応用，である。

①の西洋社会政治思想の紹介と評論に関しては，呉文藻自身，フランスやドイツ，アメリカ，イギリスの社会学の流れを紹介している。アメリカの社会学については，ギッディングス[6]の社会学を紹介している。ギッディングスは呉文藻がコロンビア大学大学院に在学していたとき，社会学科の教授であった。1931年の「馬克思派主義与費辺派社会主義的比較」では，マルクス主義とフェビアン派による社会主義思想の歴史と内容を概観し，比較を行っている。

②の「社区」研究の提唱とは，“Community”の訳語として「社区」という言葉を使い，社会調査を行う研究である。呉文藻は「社区」研究に関し，「みな同じ区位のあるいは文化の観点と方法を用い，それぞれ各種地域の違った社区研究を行う」と述べている。実際に彼は農村調査を行い，彼の学生を各農村に派遣し，それぞれの調査を行わせている。

呉文藻の「社区」研究は，「社区」を一単位として，実地のフィールドワークを通して，社会学や人類学を発展させた。「社区」という概念は現在でも社会学や人類学の世界だけでなく，日常的にも使われている。

③の社会学中国化の主張は，外来の社会学を中国の現状に適合させるという主張である。呉文藻は社会学中国化の主要なものとして「健全な理論

と方法を紹介しながら，正確な実地調査の報告を提供する」ことであり，主な主張は「社会学の理論と方法を文化人類学あるいは社会人類学と結合し，中国に対し社区研究を進め，合わせてこの種の方法が「我国の国情と最も合っている」と考えることである。」と述べている。

社会学中国化に関しては，現在の中国における社会学においてもその実現の難しさで議論が続いている。しかし，入ってきたばかりの社会学と人類学を中国で根付かせるために中国の実情と適合させるという主張は当然のことであり，中国における社会学，人類学の発展に大いに貢献することであった。

④の「機能主義の理論と方法の応用」に関して，呉文藻はイギリスの機能主義派の理論と方法を用いたと書いている。また彼は，機能主義の導入に関し，「現代社区の核心を文化とし，文化の単位を制度とし，制度の運用を機能とする」「機能という観点は，簡単に言うと，まず社区を「全体」として整理し，この全体の立脚点からその全部の社会生活を考察し，この社会生活の各方面が密接に関わっており，ある統一システムの各部分であると考える。」と言っている。つまりは，全体を考察してからそれぞれの単位を見ていくことを奨励したのである。

呉文藻はアメリカ留学当時ボアズ[7]の歴史人類学に興味を持ったが，ボアズの理論では完璧ではないと感じていた。そこで彼はイギリスのラドクリフ・ブラウン[8]による機能主義を中国に適した方法であると考えたのである。ラドクリフ・ブラウンの紹介として，1936年に「布朗教授的思想背景与其在学術上的貢献」を書いている。

呉文藻の学術的貢献としての上記の四点は，中国社会学人類学の先駆者として充分な貢献を示している。彼はアメリカから帰国後，昆明に逃げるまで，燕京大学において以上の功績をあげた。しかし，戦争の混乱，そして戦後帰国した後，様々な政治的混乱によって，呉文藻は安定した研究環境が持てず，充分な研究ができたとはいいがたい。

こうした激動の人生を歩んできた呉文藻であるが，学術面だけではなく政治的な面では如何なる人生を歩んできたのだろうか。彼は激動の人生を行きぬくために如何に政治に対応したのだろうか。次章ではこの二点に関して詳しく見ていくことにする。

3，呉文藻の政治性

ほとんどの人生を中国における社会学と人類学の発展に捧げた呉文藻には，一見政治的な要素があまり見られない。しかし彼の人生について順を追って見ていくと，それぞれの時期に政治的なもの，事柄に対応していたことが分かる。

彼の政治性について，詳しく見ていく。

①大江会

呉文藻は1923年から29年にアメリカに留学していた。留学中の1925年に主にアメリカ東海岸周辺の大学に留学していた清華学校卒業生の中国人留学生29人によって大江会が結成され，彼も参加した。会員名簿によると主なメンバーとして浦薛鳳や聞一多，羅隆基，顧毓琇，梁実秋などがいた[9]。

これらのメンバーは後に，羅隆基，潘光旦のように呉文藻と雲南で関わる者，沈宗濂，浦薛鳳，王化成，顧毓琇，翟桓のように重慶の国民政府の中で働く者がいた。これらの人々は後の呉文藻の人生に深く関わることになる。

呉文藻の政治性は大江会での活動を通じ，国家主義を基点とする。大江会が宣揚する「国家主義」とは「中華人民が中国政治の自由な発展や，中国経済の自由な決定や，中国文化の自由な進展を図ること」であった。中国の自由を掲げていた点で，後の呉文藻の政治性を形成する基礎となったことが考えられる。

彼らの機関誌『大江季刊』は第一巻第一期と第二期が発行されただけである。呉文藻は，第二期に「一个初试的国民性研究之分类书目」[10]を執筆

した。これは，主に欧米の著作から国民性，国家，国家主義などを学べる著作をまとめ目録にしたものである。この論文は大江会同人が主張した国家主義の正当性を証明しようとして作成された目録である。しかし，その目録論文の中で，大江会同人が討論に用いたという用語の定義を厳密に行い，それぞれの用語に合う著作を分類しており，学問研究の性質が強いともいえる。自分自身の具体的な政治思想を声高に主張するのではなく，このように学問研究面から主義主張を保とうとするのが呉文藻の態度であったのかもしれない。

②『民主的意义』――リベラル知識人として

呉文藻が生涯書いた著作について，以下のリストを作成した。

◎呉文藻著訳目録（暫定版。《呉文藻人類学社会学研究文集》民族出版社1990年などから作成）

1926年「民族与国家」（《留美学生季刊》第11巻第3号）

1928年　The Chinese Opium Question in British Opinion and Action（博士論文）

1931年「马克思派社会主义与费边派社会主义的比较」（《社会问题》第1巻第4期，第2巻第1期）

1932年「文化人类学」（孙寒冰主编《社会科学大纲》第三章，上海黎明书局出版）

「现代法国社会学」（《社会学刊》第3巻第2期，下编《社会学刊》第4巻第2期）

1933年「季亭史的社会学学说」（《社会学刊》第4巻第1期）

1934年「蒙古包」（《社会研究》第74期）

1935年「德国系统社会学派」（《社会学界》第8巻）

「现代社区实地研究的意义和功用」（《社会研究》第67期）

「冯维史的经验学派社会学」(《社会研究》第86期)

「中国社区研究的西洋影响与国内近状」(《社会研究》第111期,第112期)

1936年「社区的意义与社区研究的近今趋势」(《社会学刊》第5巻第1期)

「布朗教授的思想背景与其在学术上的贡献」(《社会学界》第9巻)

「对于中国乡村生活社会学调查的建议」吴文藻编译(《社会研究》第116期)

1938年「论文化表格」(《社会学界》第10巻)

1940年「民主的意义」(《今日评论》第4巻第8期)

「论社会制度的性质与范围」(《社会科学》第116期)

1941年「如何建立中国社会科学的基础」(《三民主主义周刊》第2巻第9期)

「抗战时期与恋爱问题」(《妇女新运》第3巻第4期)

1942年「边政学发凡」(《边政公论》第1巻第5, 6合期)

1943年「印度的社会与文化」(《文化先锋》第2巻第16期)

呉文藻の著作を見る限り，学術的な文章が多く，政治的な文章は少ない。しかし，彼の政治性の一端をうかがえる文章として，1926年「民族与国家」(《留美学生季刊》第11巻第3号と1940年「民主的意义」《今日评论》第4巻第8期[11]がある。

1926年「民族与国家」はアメリカ留学時代，大江会の影響の下，書かれたものである。最も彼の政治性，思想が濃厚に出ていると思えるものは1940年の「民主的意义」であるので，それを検討してみよう。

この「民主的意义」という文章は，呉文藻が重慶へ移動する前，昆明で書かれたものである。呉文藻は1938年から昆明で雲南大学の社会学，人類

学講座を担当し，重慶に移動する40年まで，担当していた。同じ昆明にあった西南聯合大学の教員たちとは当然交流があった。謝冰心は『我的老伴——之二』で当時交流があった西南聯合大学の教員として言語学者の羅常培[12]，作家の楊振声の名を挙げている。こういう昆明のリベラル知識人との交流を通して，彼自身の「民主」と「自由」の意義を明らかにしたものである。この文章は呉文藻のリベラル知識人としての思想を明確に表した文章なのである。

「民主的意义」は特に章立てして論じているものではない。それゆえ内容とその特徴を文章の流れに沿って検討してみることにする。

まず「自由」の定義として，「自由是民主的神髄，是保障一切主义的条件」とし，「民主」に関しては「民主系独裁（别译“专政”，或译作“狄克推多”[13]的对代名词，若就政治言，不论是法西斯政权，纳粹政权，或共产政权，三者之间，有一共通的特征，即同为独裁是也。」と書いている。

「自由は民主の神髄である」という言葉や「民主」とナチズム，ファシズム，コミュニズムと対立するものであり，独裁であるという言葉は当時の《今日評論》のほかの文章でも見られた。当時のリベラル知識人の間で共通した認識であったと考えられる。

次に，「民主の真の意味」として，「国家」と「社区」の違いを肯定している。この違いとは，「亦即国家与文化的区别，使之形诸事实。同时民主政治，必然是实实在在的宪政法治，人民的自由及权利，在宪法上得有保障」としている。

さらに呉文藻は「社区」の定義を「社区是人类社会互动的一种广大区域」「社区是社会中一相当限定的区域」としている。人々の生活の基礎となる場所である。ゆえに文化の生まれる場所である。

一方，国家の定義は，「国家是社会组织的一种特殊型式」「因为它是社区所管辖的一种机关」としている。「国家」は，社会組織の特殊な形式であり，社区が管轄する一種の機関で，「社区」と「国家」とは区別する必要

があるとしている。民主は「社区」から生まれる文化の「自由」を保障する制度なのである。

この箇所の特徴は，呉文藻の提唱した「社区」概念を用い，民主を分析している点にある。これは彼の学問的に得意な部分を使って「民主」を分析した彼の特徴を表すものなのである。

民主政治の役割として，「即在凭藉宪法的形式，以建立“社区广于，大于！国家”的原理」「在民主之下，才将国家与社区的区别，立为政治制度的基础。民主政治断定国家是社区的一种组织形式」と書いている。「民主」と「憲法」に関しては当時の多くの論客が論じた問題である。「憲法」を用いて，「社区」と「国家」を区別し，政治制度を打ち立てることを論じたのは，やはり呉文藻の特徴を示す箇所であろう。

続いて，民主の広義として，「民主不仅一种政体与国体，或一种社会组织与控制；推而广之，民主亦代表一种文化体系一种人生态度」「广义的民主社会与民主文化，具有两种基本条件；一是物质的，客观的条件；一是主观的，精神的条件，经济秩序代表客观的条件具备，民主制度与民主精神，才能互相维系，保持长久的存在。」としている。

「民主」を「文化体系と人生態度」とし，制度と精神をつなげている。人生観や精神とつなげた言説は他の箇所でも見られる。「民主」は「希望哲学，楽観主義」とし，独裁を「失望主義」「悲観主義」としている。「民主」を人々の心のあり方とつなげたのは，社会学者らしい言説といえよう。次は，当時のリベラル知識人の中でも異彩を放っている主張である。

「民主政治与社会阶级可以同时并存」

「民主政治与计划经济是相成的」

「民主」の反対であるコミュニズムの要素である社会階級と計画経済を肯定し，民主政治の中に取り入れるべきとしている。これは《今日評論》の知識人の中には見られなかった主張で，この文章の一番の特徴といえるだろう。

彼のリベラル知識人としての要素を最も表しているのは次の箇所である。彼は「民主」の人生観として「人には人の価値があり，独立した人格がある。そして他人の人格を尊重し，同時に他人が自分の人格を尊重すると期待すると信じる」としている。

これは彼自身の希望であり，リベラリズムを理想とし，実践する思想を表している。水羽信男氏の定義に従うと，リベラリズムは「「個の尊厳」に基礎を置く自由と平等に関わる諸原則を実現しようとする」[14] ことであるという。この定義からも呉文藻が「個の人格」の尊厳を重要視していたことで，リベラリズムを実践する知識人であったといえるだろう。

最後に「我々は国家，民族の生存を守るためだけでなく，「民主が独裁に対抗する路線」を肯定するために戦うのだ。我々は最後に勝利がきっと民主のものであるので，最後の勝利もきっと我々のものであると深く信じている」と結論付けている。この結論は浮ついていて，青臭いとすら思うかもしれない。しかし，「民主」と「自由」を掲げ，リベラル知識人として，抗戦に参加しているのだという自負を感じることができると考えられる。

この文章を書いた直後，呉文藻一家は重慶に移ることになった。第二章で述べたように，彼は雲南大学社会学科の主任をしていた。しかしイギリスによる義和団賠償返還金が妨害を受け，講座が続行できなくなった。同年末，呉文藻は清華学校の同窓生，浦薛鳳[15]，顧毓琇[16] に呼ばれ，重慶国民政府の国防最高委員会参事室で研究工作に従事することになった。参事室では，辺境民族の管理などの調査，視察を行った。

重慶に移った直後の1941年，呉文藻は『三民主義周刊』という国民党の雑誌の第2巻第9期に「如何建立中国社会科学的基础」という文章を書いている。全体的な内容は，中国における社会科学を確立するための具体的な方法を提言したものである。学問的な内容が中心であるが，社会科学研究の基礎を作り上げるための提言の中に，次のような民主主義や思想の自

由など政治的な箇所がある。

第三，吾国学术研究基金，既全靠国家来维持供给，则政府控制财源以后，就可以左右全国学术方针。惟望贤明政府当局，为促进社会科学，养育专门人才，实现民主政治，完成建国大业着想，而忠实地保障学术自由，以学术自由为一国学术方针之最高原则，勿使实际政治妨碍学术之自由发展。

思想自由乃民主主义的基石，保卫民主主义的战争，以即是保卫思想自由的战争。中国既是站在民主阵线的上面，又是反侵略的先锋，则保障思想自由，一时政府的职责。自然处在抗战危急时代，中心思想必须统一，主要力量必须集中；凡爱国人士，对此最高指导原则，没有不竭诚拥护的。不过思想自由是社会进步所必需的条件，没有自由思想，就不能发现真理；不能发现真理，就没有社会进步。故欲求社会进步，民主长存，就必须一面提倡思想自由，一面鼓励责任言论，若想彻底纠正青年错综纷歧的错误思想，亦只有充分激发成年公正合理的健全理论。

以上の箇所で呉文藻は，社会科学を促進し，優秀な人材を育てることと，民主政治の実現と建国大業の着想の完成を同列に扱い，この四つを目的として，学術の自由の保障を求めている。そして彼は何よりも思想自由を第一とし，学問の自由を最も必要なものと主張している。「民主」と「自由」を掲げるリベラル知識人としての要素は，重慶に移った後の1941年にもまだ保たれていたことが分かる。

呉文藻が重慶に移り働いた国防最高委員会参事室[17]とは，国防最高委員会の下に設けられた部署である。国防最高委員会は，1939年２月国民政府において成立した最高政策決定機構である。その下に秘書庁が設けられ，またその下に参事が集められ，参事室が設けられた。秘書庁における参事には欧米留学経験者で学術界の出身者が多く含まれた。参事には王化成，

浦薛鳳，章淵若，呉景超，蕭公権，沈宗濂，鄭振文，呉文藻，徐道鄰，董霖，呉祥麟，翟桓，徐敦璋，顧毓琇がいた。その中で呉景超，王化成，浦薛鳳，呉景超，沈宗濂，翟桓は大江会のメンバーでもあった。彼らの中には国民政府の中堅幹部となっていくものもいた。

上述したように呉文藻は国民政府の中で働いたが，国民党には入党していない。参事室での活動は呉文藻の「辺政学」（辺境の政治と辺境民族の管理に関する学問）の提唱につながっていく。1942年「边政学发凡」では，辺政学の実用的研究の重要性について以下の二点を挙げている。

> 边政学的实用研究，意义尤为重大。只说两点（略）第一，在本国的意义：中国这次抗战，显然的是整个中华民族的解放战争（略）就趁早实行准许国内各民族地方自治的诺言，而共同组织成为一个自由统一的（各民族自由联合的）（略）第二，在国际上的意义：（略）这次抗战胜利，对外国家独立自由的目的，对内实行各民族一律平等的政策以后，可在和会席上，增高我们的地位，加强我们的发言权[18]。

この箇所から，呉文藻は参事室での辺境民族の管理などの調査，視察の仕事にやりがいを感じ，この仕事が自らの学問の進展につながっていると感じていたと思われる。そして，彼が学問を通じて，抗日戦争への貢献，中華民族への貢献を果たしていると実感していたと考えるのである。

5，おわりに

呉文藻は学問への情熱が家族への思いよりも強かったと揶揄されたように，学問の発展に彼の一生の情熱を傾けた。彼にとって学問が何よりも大事なものだったのかもしれない。しかし，彼は妻である謝冰心の支えを受けながら，盧溝橋事件以後の激動の時期を彼女と共に切り抜けていった。

政治的な面では，アメリカ留学時代に目覚めた国家主義から，1940年代

前後には「民主」と「自由」を掲げたリベラル知識人としての要素を持った。その後，国民政府の中に入っていくが，リベラル知識人の要素を保ちながら，そこでの仕事にのめりこんでいく。それは呉文藻が学問を第一に考え，自らの学問にとって意味ある仕事だと考えたからであろう。

呉文藻は，国民党の統治に不満を持ちながらも，自らの学問のために残り，学問を通して抗日戦争，中華民族に貢献しようとした。彼の姿勢は権謀術数を常とする政治の世界に対し，敏感でなかったかもしれない。しかし，呉文藻の学問に対する純粋な思い，まっすぐな生き方を見ることができるのである。

注

1) 謝冰心「我的老伴——之二」(『冰心全集（八)』海峡文芸出版社，1994年)
2)「呉文藻自伝」(『晋陽学刊』1982年第 6 期掲載)
3)『呉文藻人類学社会学研究文集』民族出版社1990年
4) この箇所は主に「呉文藻自伝」(『晋陽学刊』1982年第 6 期掲載)，瀬川昌久『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』(世界思想社，2004年)を参考にして書いた。
5) この論文は1928年12月にコロンビア大学に提出された。その後，“Academic Press” より出版された。現在この論文のマイクロフィルムがコロンビア大学図書館に，出版された論文がエール大学法学部図書館に所蔵されている。筆者はエール大学所蔵のものを参照した。
6) フランクリン・H・ギッディングス（Franklin Henry Giddings, 1855-1931）は，アメリカの社会学者である。1894年から1928年までコロンビア大学教授を務めた。
7) フランツ・ボアズ（Frantz Boas, 1858-1942）はドイツ生まれのアメリカで活躍した歴史人類学者。米国先住民の研究で知られ，アメリカの人類学の父とも呼ばれる。
8) ラドクリフ・ブラウン（Alfred Reginald Radcliff-Brown, 1881-1955）はイギリスの文化人類学者である。彼はフランスの社会学者，デュルケムの理論を用い，構造機能主義を唱えた。分析概念の社会関係と社会構造の概念を明らかにした。
9)『大江季刊』第一巻第二期に掲載された会員名簿によると結成メンバーは

次の通りである。何浩若，呉沢霖，沈有乾，沈宗濂，浦薛鳳，聞一多，熊祖同，羅隆基，薛祖康（以上1921年度卒業生），沈鎮南，潘光旦，时昭瀛，陳欽仁，陳華寅，張継忠，黄蔭普，劉聡强，蔡公椿，魏毓賢（22年度卒業生），王化成，孔繁祁，呉文藻，呉景超，徐宗涑，顧毓琇，梁実秋，翟桓（23年度卒業生），胡毅，胡竟銘（24年度卒業生）。他に謝冰心にも入会を勧めたという。

10）筆者は，第一巻第一期は見たが，第二期については未見である。呉文藻の目録に関しては大江会についての先行論文を参照した。先行論文には楠原俊代「アメリカ留学生の肖像――大江会同人をめぐって（正）」（竹内實著『転形期の中国』所収），「アメリカ留学生の肖像――大江会同人をめぐって（続）」（『同志社法学』第三十九巻第一・二号合併号，p 313～325）がある。以上の二編を参照した。

11）1939年雲南の昆明で創刊された雑誌である。執筆者は西南聯合大学や雲南大学の教員や学生などであった。主な執筆者に，王赣愚，潘光旦，王信忠，費孝通，銭端升，羅隆基，曾昭抡，沈従文など。彼らのほとんどは欧米留学経験者であり，「リベラル知識人」といわれる人々の論壇となった。
《今日评论》に関しては水羽信男「昆明における抗戦とリベラリズム」（石島紀之／久保亨編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会2004年）を参照した。また水羽信男広島大学教授には《今日评论》のマイクロフィルムをお貸しいただき，ご教示賜った。ここに記して感謝申し上げます。

12）羅常培（1899-1958）字は莘田。北京大学卒業後，北京や天津で中学教師となった。後，西北大学，中山大学教授を歴任し，北京大学教授となった。盧溝橋事件勃発後，北京大学の南遷に従い，長沙臨時大学，西南聯合大学教授となった。1944年アメリカへ行き，48年帰国した。1950年中国科学院語言研究所創設に努めた。

13）Dictator（独裁者）のこと。

14）前掲文，水羽信男「昆明における抗戦とリベラリズム」

15）浦薛鳳，江蘇常熟出身の政治学者，字は逖生。1931年国立清華大学政治学系主任を務める。盧溝橋事件勃発後は，西南聯合大学の政治学系主任を務める。重慶国民政府の国防最高委員会参事室に勤め，帰台後は台湾に移動。1949年から53年まで台湾省主席秘書長，48年から51年まで中華民国教育部政務次長などを務める。政治大学教授，清華大学（台湾）教授などを歴任した。著作に『西洋近代政治思想』など。

16）顧毓琇（1901-2002）字は一樵。無錫出身の科学者，教育家，音楽家。彼

の才能は多岐にわたる。本職の電機工学だけでなく，戯曲，小説，作曲など幅広い活動を行った。1922年マサチューセッツ工科大学に留学した。帰国後，国立中央大学工学院院長，清華大学首任工学院院長，国民政府教育部次長，国立政治大学校長を歴任した。台湾に至った後アメリカに渡り，アメリカで亡くなった。

17) 劉維開著「国防最高委員会の組織とその活動実態」(前出『重慶国民政府史の研究』より。

18)「边政学发凡」(『呉文藻人類学社会学研究文集』民族出版社1990年所収)より。